

The Role of the ‘Foreign’: Examining the Use of the ‘Foreign’ in Japanese Transgender & Gender Identity Disorder Discourse

By S.P.F. Dale

Abstract: Examining texts from the late 1990s up until present, this paper looks at how the example of ‘foreign countries’ and ‘foreign culture’ has been used in the transgender and GID discourse(s) in Japan. No matter the topic of argument, the ‘other’ (by proxy ‘foreign’)—be it culture, humans, countries, or otherwise—presents a starting point for comparison. With regards to the establishment of the concept of ‘Gender Identity Disorder’ in Japan, what role did the ‘foreign’ play in the shaping of its discourse? In contrast to this, how did the ‘foreign’ come to be used by transgender activists or individuals objecting to the medicalization of transgender identities as well as in the establishment of the Japanese term ‘*toransujendaa*’? This paper treats the ‘foreign’ (in this case countries and culture) as signifying two different types of cases: 1) concrete examples, such as the law in other countries; 2) an imaginary/imagined existence. Whilst examining how the ‘foreign’ has been utilized in texts pertaining to Gender Identity Disorder and transgender in Japanese (and about Japan), this paper seeks to examine the practical, personal as well as political purposes that the ‘foreign’ has.

Keywords: Transgender, Gender Identity Disorder, the use of the ‘foreign (country/culture)’, ‘global queer’, culturally ambiguous transgender

日本のトランスジェンダー・性同一性障害論における「外国」・「異文化」の役割

S.P.F. デール

【要旨】日本におけるトランスジェンダー論では、しばしば「他者」の状況、「他国」や「他文化」の例が比較対象として挙げられることがある。本研究は、日本における「性同一性障害」という医学的および社会的概念の発生、および「性器」の排除・再構築（「性転換」、「性別適合手術」）の公認という過程に、「外国」の存在がどのような役割を果たしたのか、また「トランスジェンダー」という概念や「トランスジェンダー」と呼ばれる存在の医学化に反対する人々は、「外国」をどのように用いているのかを考察する。本論では、「外国」および「異文化」は、主にある国の法律などの具体例、あるいは抽象的な概念、の二つを指す。しかし、この二つは必ずしも明確に区分されて用いられている訳ではない。実際の議論において「外国では・・・」という例が挙がる一方で、その「外国」というものがどこにあるか不明なことが多い。これらのことを踏まえつつ、1990年代後半から現在までの日本語におけるトランスジェンダー・性同一性障害論を参照しながら、一般書籍や学術論文を対象に「外国」・「異文化」の使用例を分析し、これらの単語が性同一性障害・トランスジェンダー言説の形成にどのような役割を果たしたのかを検討するとともに、それらの単語の政治的・個人的使用目的を考察する。

【キーワード】トランスジェンダー、性同一性障害、外国・異文化の使用、「グローバル・クィア」、文化的に曖昧なトランスジェンダー

1. はじめに

本論文では、日本語で行われてきた性同一性障害・トランスジェンダーをめぐる言説における「外国」・「異文化」と呼ばれるものの扱いについて、「日本」という地域的・文化的な観点から分析する。具体的には、1990年代後半から現在までのトランスジェンダー・性同一性障害言説関連の書籍における「外国」または「異文化」の具体的な例やその使用目的を明らかにし、言説においてどのような役割を果たしたか、またどう扱われたかを考察する。

「トランスジェンダー」、「transgender」、「性同一性障害」、「Gender Identity Disorder」、これらの英語または日本語の用語と概念は比較的新しいものといえるだろう。各用語の歴史的な背景は後述するが、概念としてはそれぞれ性別・ジェンダーを「越境する」という行為に関して使われている。しかし同時に、明確に何を指しているかは各事例や使用者によって異なる点を、忘れてはならない。カタカナ語の「トランスジェンダー」は、英語の「transgender」に基づいてつくられたと考えられており、「性同一性障害」は英語の「Gender Identity Disorder」の翻訳だと説明されている。そのため、これらの概念構造は、英語で行われてきた言説がなければ日本語では存在し得ないものといえる。

1990年代以降、「トランスジェンダー」という言葉が知られるようになり、そしてこの年代に「性同一性障害」という概念が日本に成立した。むろん、その用語が表している存在自体は必ずしも新しいものではない。あくまでも用語や概念の問題である。また調査・分析の対象となっている書籍が「トランスジェンダー」または「性同一性障害」の議論なのかどうかは、各執筆者の定義によることとする。つまり、本論文で出てくる「トランスジェンダー」と「性同一性障害」という言葉の定義は、私が定義することではなく、本論文に引用する執筆者による定義とする。

調査対象となっている書籍は、特に「性同一性障害」または「トランスジェンダー」についてのノンフィクションであり、分野は一般図書から法律、社会学など多岐にわたり、いずれも日本語で執筆されたものである。ただし、本研究では新聞・テレビなどマスメディアにおける情報を対象としていないため、一般社会において「外国」が日本へ及ぼした影響については、具体的に議論・考察を行わない。それよりも、むしろ「性同一性障害」や「トランスジェンダー」をめぐる各議論にどのような役割を果たしたかについて、各執筆者の「外国」・「異文化」の使用例を挙げながら考察したい。各執筆者が日本の「トランスジェンダー」・「性同一性障害」の状況を把握するため、またこれらの言説を普及させるために、「外国」および「異文化」というものをどう使用したか、本論文で述べていく。

本論では「transgender」と「トランスジェンダー」（あるいは「GID」と「性同一性障害」）の両方を利用する。「Transgender」を使う場合は英語で書かれたものを参照する場合であり、「トランスジェンダー」は日本語の言説に対して使われる。特に、後者の場合は、ジェンダー・性別を越境する存在の総称としても用いる。なお、本論文では詳細を述べることができないが、同じ用語として英語と日本語の言説が繋がっている、両者には差異が生じている可能性があることを指摘したい。また、同じ言語や文化の中であっても異なる定義が存在することも付記しておく（Valentine 2007）。

2. 背景

2.1. 「Transgender」と「Gender Identity Disorder」—概念の成立

性別・ジェンダーを越境する、言い換えると社会的なジェンダーの基準に従わない（異性装、「女らしい男」、「男らしい女」等）人々は、19世紀末からドイツの精神医学者 Richard Krafft-Ebing と医師 Magnus Hirschfieldの研究に見られるように、欧米で特に精神科などの医学的な研究対象となる。Hirschfieldの下で活動した経験を持つHarry Benjaminは、「transsexual」¹という言葉に浸透させた（Stryker 2006, 4）。Benjaminはもとドイツで活動していたが、第一世界大戦以降はその一生を終えるまででアメリカで暮らしていた。当時、「transsexual」の持つ意味は精神的・社会的に属している性別へ身体を合わせるという状態を指しており、元々は精神科学の文脈で作られた言葉である。1950年代に、Benjaminの著書『The Transsexual Phenomenon』が出版され、そしてBenjaminの患者であったJorgensenの影響で、transsexualとtranssexualityについての研究が特に1960年代に盛んとなった。Christine Jorgensenはアメリカ人として初めて、男性から女性への「性転換」と呼ばれる当時の手術を受けたことで、日本を含め（三橋 2006）世界中で論争を呼ぶ人物として知られるようになった。Jorgensen以前、当時「性転換」と呼ばれる手術を受けた個人もいたが、Jorgensenのケースは初めてメディアで大きな注目を集めた。同じ1960年代、Jorgensenの手術成功をきっかけにアメリカでtranssexualityの問題が注目を浴び、またJohn Hopkins Gender Clinicを始め

¹ 現在、英語の「transsexual」は二つのスペルがある。一つは「transsexual」で、本来のスペルであり、医学的な意味があると考えられる。もう一つは「transexual」で、その医学的な意味を乗り越えるために使われている。しかし、このスペルの区別も使用者によって異なっている（Valentine 2007, 25）。

とするtranssexualityを研究・診断するためのセンターが立ち上がった。1980年には、「transsexualism」の一区分として「Gender Identity Disorder」という診断カテゴリーがアメリカ精神医学会（American Psychiatric Association）によって定義された（Stryker 2006, 14）。その診断的特徴は、以下のものである。

性同一性障害には2つの要素があり... 反対の性に対する強く持続的な同一感の証拠が存在していなければならない、それは、自分が反対の性になりたいという欲求、または自分の性が反対であるという主張である（基準 A）。この反対の性に対する同一感は、単に他の性であることによって得られると思う文化的有利性に対する欲求だけであってはならない、また自分の性に対する持続的な不快感、またはその性の役割についての不適切感も存在していなくてはならない（基準 B）。（American Psychiatric Association 2002, 551）

社会的なジェンダーの基準に従わない個人のあり方と医学との関係は非常に複雑であり、しばしば論争となっているが本論文ではそれについて詳しく述べきれない。しかしここで注目すべきは、医学関係者による、ジェンダーの基準に沿わない個人のあり方の扱い方にある。医学的に、このようなあり方は「病気」または「疾患」、「障害」と扱われ、「治すべき」状態と判断されている。このような考え方に反対した一部の個人は、自身のあり方を「病気」ではなく人間としての一つのあり方であると主張している。「Transgender」という用語は、こういった考え方に基づく反対運動の中で 1990 年代に作られたと考えられている（Stryker 2006, 4; Valentine 2007, 32-33）。初めてその言葉を使用したのはVirginia Priceという身体的に「男性」で、日常を「女性」として過ごしていたアメリカ国籍の人物だと考えられているが、一方でStrykerの研究によると、現在一般的だとされるその解釈はLeslie Feinbergが普及したものとされている（Stryker 2006, 4）。Transsexualという言葉の意味が、与えられた性別から精神的・社会的に属すると認識している性別へ変更するため性転換を受けるということであれば、「transgender」は性器の変更をせず、表現や行為を逆手に取りジェンダーを変更することである、とPriceによる解釈枠組みからは説明できる（Stryker 2006, 4）。しかしLeslie Feinbergの議論の影響もあり、「transgender」はそのような名詞的な意味から形容詞的なそれに変容し、ジェンダーの社会的基準に従わない様々な人々の在り方を総括的に言及する言葉となった（Stryker 2006, 4）。そのため、英語で、特にアメリカの文脈において、生まれた時に「女性」という性別を与えられたにもかかわらず、「男性」へ移行する人を「transgender man」

や、省略形の「transman」と呼ぶことが多くなっている²また、最近では「transmasculine」や「transfeminine」という用語も使用されている³。

以上で述べてきた歴史は、初期の医学的な進展を除けば、主にアメリカで展開されてきたといえる。特に「transgender」という用語を使用した活動や運動に関しては、歴史的に記録されたものの多くがアメリカでの事例である。しかし、インターネットの普及あるいは英語使用者の増加にともない、この歴史は共用的なものへ変容し、「アメリカにおけるトランスジェンダーの歴史」であったものが、いまや「トランスジェンダーの歴史」となりつつある⁴。

2.2. 戦後日本における状況

日本における女装の歴史は、ある程度詳しく記録されている（三橋 2006a, 2006b, 2008; 矢島 2006）。しかし、生まれながらにして「女性」の身体をもちながら「男装」あるいは「男性」ジェンダーへと移行する存在についての記録は比較的少ない。そのため、日本の「トランスジェンダー」や「性別越境」の歴史となると、多くの場合が「女装」についての話になる（三橋 2006, 389）。

三橋（2006, 2008）は日本の女装の文化史は長く古くから存在していたと指摘している。戦後では、1950年代から「性転換」に関する外国からの情報量が増えたこともあり、日本国内の状況も注目を浴びることとなった。例えば、先述した1953年にChristina Jorgensenの有名な性転換事例は多数の新聞で取り上げられた。この報道をめぐって日本のマスコミは「日本版クリスチーナ」を探し始めるにもいたった（三橋 2006, 404）。しかし三橋によれば、日本の女装文化は戦後から1960年代後半まで盛んであったにもかかわらず、1969年を境に女装文化が表に出てこなくなったとされる。その原因となったのがかの「ブルーボーイ事件」

² 具体例として次の記事を参考されたい。「Transgender Americans Take on New York」
<http://www.bbc.co.uk/news/magazine-15642294>（2012年6月5日）や「Decision on Transgender Player」
<http://www.nytimes.com/2010/12/28/sports/golf/28sportsbriefs-longdrive.html?ref=transsexuals>（2012年6月5日）

³ 「Sugarbutch Chronicles: Define Masculine」
<http://www.sugarbutch.net/2008/08/the-term-transmasculine/>（2012年9月1日）、「Genderqueer Identities」
<http://genderqueerid.com/post/9740128494/i-know-male-and-female-words-in-reference-to-gender>（2012年6月5日）

⁴ 一例として、Susan Strykerの『Transgender History』という著書は、実際にはアメリカの状況についてのみ書かれている。しかし、Strykerはこのことを認め、本のタイトルは出版社の勧めによると説明しているようである。（<http://zagria.blogspot.com/2010/04/susan-stryker-transgender-history.html>）（2012年6月5日）

である（石田 2008）。これは、3 人の男娼が国内で精巣を排除する手術を受けたことが、「優生保護法」に反したと判断され、手術を行った医師が逮捕・起訴された、という事件である（三橋 2006b, 437）。判決の根底にある考え方として、1948 年に施行された「優生保護法」⁵があると考えられている。この法律では、第 28 条で「何人も、この法律の規定による場合の外、故なく、生殖を不能にすることを目的として手術又はレントゲン照射を行つてはならない」とされており、戦後の優生的な考え方が反映されたものであった。ブルーボーイ事件以来、「性器」改造の手術は国内で地下化され、手術を望む人たちは海外へ向かう傾向が発生した（三橋 2006b）。しかし性器に関わる手術が国内で禁止されてもなお、日本のトランスジェンダー・女装文化は存続していた、と三橋は語る。三橋によると、1980 年代後半からは「バブル経済期とその余韻の時代に相当し、性的に自由かつ奔放な雰囲気が横溢した時期だった」（三橋 2006b, 463）とあり、トランス文化の繁栄もそれと関連があったとしている。同時に「性的に自由」な時期とはいえども、可視化されるトランスジェンダー的な存在のほとんどが芸能界に限られ、性転換手術においても財源があるならまだしも、そうでない人々にとっては困難なものであったと考えられる。また、手術を受けても戸籍上の性別変更は皆無に等しかった。

1998 年に「性同一性障害」という精神障害としての概念の成立とともに、性別やジェンダーを越境する存在に関する社会的な考え方が大きく変わっていく。トランスジェンダー的な存在が病理化され、三橋の言葉を借りれば「面白い」から「かわいそう」な対象へと移行したのである。（三橋 2008）。当事者またはクィア⁶団体などの間で、「トランスジェンダー」という言葉は 1990 年代から使われるようになったとされるが（三橋 1997）、1989 年に出版された渡辺恒夫の『トランス・ジェンダーの文化』や 1990 年の『トランス・ジェンダー現像』などをみても、1980 年代後半から既に使われ始めていることもわかる。カタカナの「トランスジェンダー」という言葉の使用背景に関して、Valentine（2007）による「transgender」の使用についての研究に匹敵するような詳しい分析はまだなされていない。しかし、三橋が指摘しているように、「トランス」という言葉は「使う人の立場によって微妙に異なるニュアンスで語られている」（三橋 1997, 120）。トランスジェンダーは性同一性障害と異なるのか、また誰のことを指すのかは、人の立場によって異なる。ト

⁵ この法律は 1996 年に法改正され、「母体保護法」へと改名した。しかし、法律の内容はほぼ同様であり、現在に至っても施行されている。

⁶ 本論文では、「クィア」という言葉は社会的な「逸脱者」と指摘されている存在を指し、特に同性愛者、両性愛者、ならびに「ジェンダー・性別を越境する存在」を指すために使っている。

ランスジェンダーを自称する人が他人から性同一性障害者と呼ばれたくない場合や、その逆の場合があるため、同じ存在を指す場合があるとしても同意語と扱えられるわけではない。

本論文で分析する多くの書籍は、「トランスジェンダー」よりも「性同一性障害」という言葉を利用している。このことから、「性同一性障害」が「トランスジェンダー」よりも実際に言葉として社会に浸透していることを指摘できる。クィア運動にたずさわる活動家や団体は、トランスジェンダー的な存在を脱医学化するため、「性同一性障害」という言葉よりも「トランスジェンダー」という言葉の正当性を主張している例もあるが (cf. 田中 2006; 米沢 2003a)、依然として少数派である。

2.3. オリエンタリズムそしてオクシデンタリズムと日本のクィア言説における「外国」「異文化」の使用

Edward Saidの「オリエンタリズム」によると、「オリエント」というものは西洋⁷の学者の手により創造され、中東を「異文化」として扱うことで、欧米をより進展した文化とし表すために使用される (Said 1978)。一方Saidの議論に基づき、「オクシデンタリズム」という概念も構築されている (cf. Carrier 1995)。オリエンタリズムとオクシデンタリズムはともに、異文化を「他者」とすること (英語で「othering」) を示す。いずれにしても「他者」化するという過程は、歴史的・政治的・経済的な側面があり、いわゆる権力の問題ともいえる。オリエントは、欧米による主に中東と呼ばれている地域についての創造であり、「東洋」と「西洋」を二分し、西洋を語るために利用されている。そこでは中東文化の多様性は単一化され、オリエントという地域の文化は西洋と比較されるなかで道徳心か希薄、または後進文明地域とされた。また西洋は「男らしい」、「強い」、「積極的」と評される一方、オリエントは「女らしい」、「弱い」、「受身」と対照的に描写される。このことから、オリエントという言葉は欧米の優勢な権力を表し、この権力の言説を支えるために用いられてきたとSaidは指摘している (Said 1978)。

さらにはオリエントとオクシデントという二分法は、様々な目的に応用される。オリエントとオクシデントが文化的に正反対として扱われることで、社会的な進展の程度を示す尺としても利用されてきた。その結果、オリエントを「野蛮」、「稚拙」、または年下の兄妹とする認識の

⁷ 本論文では「西洋」「東洋」という言葉の定義を別途議論せずに使用している。この二つの「地域」は歴史的・社会的に構築されており、本来詳細に議論されるべきだが、ここでは一般的な意味で使用している。

ほか、自然（東洋）対文化（西洋）などの二項対立軸の構築にもつながってきた。（Lindstrom 1995, 34）。現在においてもなお、欧米文化圏は世界的な「進展」に関して自らを優勢な立場へと位置付ける傾向が頻繁に見られる。Lindstrom は「auto-orientalism」（自己オリエンタリズム）または「auto-occidentalism」（自己オキシデンタリズム）という概念をもって、当事者が自らの文化に向かってオリエンタリズム・オキシデンタリズム的な発言をするという現象を説明している。（Lindstrom 1995, 35）。日本で見られるいわゆる日本人による「日本人論」はその最たるものだといえるだろう。一例として「日本の文化は独特であり、世界のどこの国とも違う」という発言をする日本人は、「日本」を特視し、詰まるところ他者化することで、自己オリエンタリズムを行なっている。

オキシデンタリズム、オリエンタリズムのいずれにせよ、この両者がもつ他文化性を他者化するという行いに本論文では注目し、応用したい。また、オリエント・オキシデントという二項での区分となると、はたして日本がいずれに属するのか、という複雑な議論を引き起こす。経済的に日本は「先進国」とされていることに基づき、「西洋」であると指摘される場合は少なくない（Carrier 1995）。しかしながら、地理的に「東洋」であり、また文化的にも「西洋ではない」とされることが多い。このことから東洋・西洋という二分的な区分の単純性、またはその諸問題が明らかになる。Creighton が示すように、明治時代また戦後以来、歴史的・政治的・経済的な文脈のなかで、欧米人（特に白人）が日本人の自己確立のための一定した「primary other」（第一の他人）を担ってきた（Creighton 1995, 142）。しかし、そこにはオキシデンタリズムもあれば自己オリエンタリズムも介在しているものの、それらの用途には当時の歴史背景や文脈が大きく関わっていたことは明白である。

日本における「外国」「異文化」のとらえ方に関する例は、トランスジェンダー・性同一性障害の言説のみにあらず、他のクィア言説にも散見される。例えば、明治時代に西洋のように日本が「進展」するため、政府が西洋の考え方を模倣しようとし、西洋の文化に「野蛮」と映る自国の風習をなくそうとした。その中の一つに男色があった（Reichert 2006）。また、現代では同性愛者による社会運動や団体によって用いられる主張において「外国」文化を参照する例が頻繁に登場する。一例として、OCCUR という団体は欧米のゲイ・レズビアン権利擁護団体が行ってきた政治的な戦略に類似したものを採用し、アイデンティティ・ポリティックスの必要性を唱えた（Suganuma 2007, 491-92）。また McLelland によると、1990 年代の「ゲイ・ブーム」の影響で、アングロフォンの国でみられるようなゲイ・カルチャーが形成されたことも指摘できる（McLelland 2005, 189）。言語文化においても同時期に「レズビアン」や「ゲイ」という用語が当事者の中で利用されるようになったこと

も注目に値するだろう (McLelland 2005, 189)。しかし、日本の同性愛者が欧米（特にアメリカ）の戦略や用語を使うことは、単に受動的な過程ではなく、それよりむしろ戦略的な政治行動であったとも説明されている (cf. ブインセント等 1994; McLelland 2005; Suganuma 2007)。本論文で扱う文献においても、それぞれの著者が設定した目的に沿って「外国」「異文化」という概念が用いられていると考えられる。

3. 「外国」・「異文化」の使用・役割

以上の議論を踏まえ、本節より、「外国」・「異文化」の使用と役割に関するテーマを分け、各テーマに沿って論文を整理する。「性同一性障害」の発生から始め、土着のトランスジェンダー的な存在に言及する際の使用と「普遍的」なトランスジェンダー・性同一性障害におけるその順番に述べる。この分け方と順番にはある程度年代順が反映されているが、本稿の著者はそれよりも連続的に議論が繋がっていると考えている。

3.1. 日本における「性同一性障害」と社会運動

「性同一性障害」は、1998年に埼玉医科大学論理委員会によって認められ、医学的に英語の「Gender Identity Disorder」の日本語訳として定義された。1996年に、埼玉医大論理委員会によって「性同一性障害答申」が出され、1998年に「性同一性障害」は「精神疾患」として定着した (石田 2008, 3)。当時行われた埼玉医大倫理委員会の議論については、当時の委員長の山内俊雄が書籍で詳細を述べている (1999, 2000, 2004)。1995年の倫理委員会で「性転換治療」に関して申請が出され、その研究の概要は次のようなものであった。

性転換治療は本邦では全くタブー視されている問題である。これらの患者は肉体の性と、頭脳の中のそれとの相違に苦しみ、自殺にまで追いやられる場合もある。そして闇で行われる手術を受けたり、海外での治療を求めるなど、暗黒時代とも言える状況にある。諸外国、特に欧米諸国ではこの治療が合法化され、健康保険の対象にさえなっている国もある。この治療を医学的に系統づけ、これらの患者の福祉に役立つことを目的に、女性→男性の性転換を行う。(山内 1999, 15)

「諸外国では、この治療がすでにある」ということは、この概要に大事な刺激のようである。また、国内「治療」というものを受けられないため、海外で手術を受けることも指摘された。埼玉医大倫理委員会の議論

で参考となっている資料は、1990年に世界保健総会（WHO）疾病及び関連保健問題の国際統計分類第10版（ICD-10）と、アメリカ精神医学が認めた精神障害の診断と統計の手引き第4版（DSM-IV）だった（山内 1999, 32）。会議で、アメリカでの状況について確認をとるため、当時アメリカに滞在していた心理学者の Reiko Homma True を招待しており、Homma True の話を聞いて山内は自分の感想を次のように述べている。

… もっとも進んだ国と思っていた米国でさえ問題があるのか、と複雑な思いを覚えている。（山内 1999, 127）

山内のこの感想から、埼玉医大倫理委員会においてアメリカは「性同一性障害」を理解するためのモデルとして捉えられていたと言える。

医学において、欧米の状況をモデルにすることは珍しくない（Fruhstuck 2003）。山内の場合、欧米（特にアメリカ）の例を利用したことは委員会に最も説得力ある議論をするためではないかと考えられる。しかし、この議論では「欧米の方が進んでいるので、追いかけるべきである」という先入観も明らかとなる。

松尾寿子は、当時展開しつつあった性同一性障害という概念について書いた（松尾 1997）。当時の報道に対して、次の感想を述べている。

日本の性転換者の多く（全てではないが）は、マスコミから、「ニューハーフ」と造語を被せられ、職業選択の自由もないまま、水商売の世界で一生懸命に生きてきたのである。その上今度は、性転換は「性転換症」という名で欧米で認知され、医療機関が治療対象に認定したのだから、「ニューハーフ」とは違うなどという。このような差異化は新たな差別と格差を生むことになりはしないだろうか。（松尾 1997, 8）

つまり、性転換はあたかもチェスのポーンのように、メディアの気まぐれによって利用されてきた。「性転換症」は欧米の概念で、当時日本のマスコミには性転換を解釈するためのレンズとなったようである。そのころ、松尾はフィンランドの友達から手紙をもらって、その内容には「… 日本のような先進国が、なぜ、トランスセクシュアルに関してそんなに遅れてしまったのか（…）本当に不思議でなりません」（松尾 1997, 28）という文章が入っていた。しかし、松尾は日本の状況を「遅れている」より、むしろ「“独自性”と説明すべき点も多く、ニューハーフの成り立ちも決して突発的なことではない」（松尾 1997, 34）と述べる。松尾は、日本のトランスジェンダーの歴史に限らず、フィンランドやオランダでトランスジェンダーの当事者や研究者と調査をしたり、アメリカのトランスジェンダー議論を紹介したりする。

松尾の目的は、上記の山内のそれと異なると考えられる。松尾の場合、欧米の国でも調査を行ったが、日本が欧米のようになれば良いという議論はしておらず、むしろその国々の異なる状況を表わすために「遅れている」という考え方に反対し、各文化とともにトランスジェンダーの様々な可能性のあり方を紹介している。同時に、性別二元論にも反対し、「自分らしい」あり方を認めている。そのスタンスは、本の最後の文章でも明らかである。「自分のアイデンティティを修正するよりも、受け入れる。あなたが、あなたでいてもいい…、それでいいんだよ。」(松尾 1997, 393)

1998 年に「性同一性障害」が公式に認められた時点で、法律をめぐる話題が次々と問題になり、議論されてきた。当時もっとも重要な問題は、戸籍上の性別変更がまだ不可能であったことである。活動家の努力で、この問題が社会的な話題となり、性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律が 2004 年によく施行された。戸籍上の性別変更を行うための条件は 5 つにおよんだが、その条件を満たせば性別変更は可能になった。性同一性障害に関する法律をめぐる問題が話題になった当時、その問題についての本が次々と出版された(大島 2002; 南野 2004; 石原&大島 2001)。外国の法律も参照されたが、国の例は欧米が中心であった。国際的な基準で「精神病」と認められていたため、その基となる法律なども検討対象となったものと考えられる。また、「精神病」という用語を定義したのも欧米諸国であったため、それら諸国が参照例となったのである。

日本でもっとも有名となった自称FTM⁸は、虎井まさ衛だと考えられる。虎井は、自分の経験について様々な書籍を出しており(1996, 2000, 2001, 2003ab)、アメリカで手術を受けたためアメリカの経験についての内容が多い。虎井は、特例法ができる以前の、日本でのトランスセクシュアルの扱いに関してとても批判的である。「... 日本国がTSに対して、いかにいろいろな点において遅れているか身にしみてわかった...」(虎井 1996, 189)、「性に関する研究が欧米に比べ大きく遅れている日本...」(虎井 1996, 199)、「欧米諸国、イラン、イラク、中国、台湾、韓国、どこもかしこも認めているというのに日本のこの遅れようはどうだろう」(虎井 2003, 13)、「ほとんどの国は日本よりマシである」(虎井 1996, 204)などのような発言がしばしば登場し、「日本が遅れている」という意見を表している。日本は、TSの人々に住みにくいため、「TSの中に、日本に見切りをつけて海外に移住し、望みの性として(ともかくも日本より規制の少ない状態で)のびのびと暮らす人もいる」(虎井 1996, 197)

⁸ FTMとは女性から男性へ「Female to Male」転換するトランスジェンダーを意味する。

とも指摘している。虎井が特に批判的なのが、戸籍に関してである。虎井は次のように述べている。

西洋諸国ばかりではなく中国や、我が国と同じく戸籍のある韓国でも許可されています。とうしてアジアの一大大国、日本でできないことがあります。そのままでは人権後進として有名になってしまいます。(虎井 2003, 78)

このような発言をすることは、単に自分の怒りにはけ口を与えることではなく、むしろ政治的な戦略として「外国」を利用していると考えられる。「日本は先進国であるべし」という概念に訴え、ある意味で変化を生むための恥をかかせている。この考え方から先述のオリエント・オキシデントという枠組みの働きかけがみられる。特に上記の韓国との比較の場合、アジアの国の例を挙げながら日本は「アジアの一大大国」と唱えている。この発言に「日本は韓国より進んでいるはず」という意が含まれていると考えられる。また、先進諸国の中で欧米の国がより先進的であるという先入観も明らかになる。

アメリカとの比較は、2003 年に出版された『トランスジェンダリズム宣言』にも登場する。この書籍は、日本におけるトランスジェンダー・性同一性障害をめぐる制度・医療などの問題を取り上げている論文を集めており、実践的な本である。本のまえがきで、「... 日本に比べて時代的に「先行」して諸問題とぶつかってきたアメリカのトランスジェンダーについての歴史・思想...」(米沢 2003b, 11) という紹介がある。この発言から、日本はある程度アメリカの足跡を辿る、という考え方が見られる。また、筒井真樹子を書いた「アメリカのトランスジェンダー・アイデンティティ」という章の終わりに、「日本との比較」という部分がある。筒井によると、「アメリカの抱える問題と日本の抱える問題の比較を論じる必要がある。この点、現在の日本のトランスジェンダーが置かれている状況は、ある時期のアメリカのそれと、似ているところもあれば大きく異なるところもある」(筒井 2003b, 150)。医療との関係については、「日本において、公式に行われた「性同一性障害」(GID) 医療の歴史は浅い。この点、アメリカにおける性転換症医療の初期の状況との類似をみることができる」(筒井 2003b, 150) と述べている。筒井によると、医療に関して当時の日本はアメリカの過去にあった時期に似ているが、一方で相違点もあるとしている。筒井が挙げる例は、クロスドレッサーに関しての国と医療の扱い（アメリカでクロスドレッサーは長く医療の対象となったが、日本では対象外だった）と、フェミニズムやセクシュアリティの関係（フェミニズムの運動などは、日本はアメリカより活発ではない）であった。

筒井の議論は主にアメリカの状況についてのものである。しかし、GID が認められている諸国の中で、どうしてアメリカが選ばれたのか。つまり、どうして日本の現在の状況は GID が認められている諸国の持つ過去の中で、どの国よりもアメリカに似ていると思われているのか、という疑問が生じる。筒井も述べたように、アメリカと日本では文化的・歴史的な違いがある。欧米の国より、この比較を行うためには東洋の国の方がふさわしいとも考えられるが、なぜかいつも欧米になってしまう。一つの考えうる理由は、トランスジェンダーをめぐる英語で出版された書籍が原因だということである。英語で出版されることは、他の言語と比較して世界中で読まれる可能性が高い。また、英語で出版されたトランスジェンダーをめぐる論文は、ほとんどアメリカのトランスジェンダーについてのものである。そのため、どこかの国で自分が調査しない限り参照できる文化は少なく、比較できるものが限られているのである。またオリエント・オキシデントの関係性を参照すると、文化的（メディア等）に最も影響力が大きい（権力が強い）アメリカはこの文脈において支配的であると言える。

3.2. 土着なトランスジェンダー

トランスジェンダー的な存在の医療化については以上で述べたが、医療化に関しては反対の声も多くあり、トランスジェンダーは「病気」ではなく、人間としての一つのあり方という考え方も現れた。トランスジェンダー的な存在の正当性を示すためも、対策は様々であった。一つは、日本の性文化と女装の歴史を示すこと（cf. 三橋 2008）、もう一つは日本ではなく、異文化の土着のトランスジェンダー的な存在を指摘し、その上でトランスジェンダーの普遍性、自然性を明確にすることであった。いわば異文化のトランスジェンダー的な人々と創造的な絆をつくることで共感を生み、トランスジェンダーの共有の歴史を作り出すという行為である。

共有の歴史を作るため、過去の人物を利用することについての批判は多数ある。例えば、あるひとつの共同体の歴史を作るために、過去に存在した人物の行動を現代の「個人のあり方」に照らしあわせ、「トランス」や「ゲイ」というラベルをつける。しかし、その人物が実際に生きていた時代にはそのようなカテゴリーはないため、その人物が本当に「トランス」なのか「ゲイ」なのかは、現在において確定できない。また、過去のことだけでなく、現代に存在する民族や文化にある性の種類が、特に欧米のトランスジェンダー研究者によって普遍化され、共同的な「トランスジェンダー史」に含まれてしまうこともある（Towle & Morgan 2006）。

三橋の著した『女装と日本人』は、ほとんどの内容が日本の歴史についてのものだが、最後の方に「女装文化の普遍性」という章がある。そこで三橋はラオスの「カトゥーイ」からオマーンの「ハンニース」まで、多様な国・文化・民族にある性の在り方について言及している（三橋 2008, 324—328）。これに従い、三橋は次のように結論づける。

このように、性別を越境する、あるいは男と女の間間的な文化要素を身につけて、それぞれに地域社会で特有の社会的役割を果たしている人々は、世界各地に広く存在していました。女装という文化は、地域や時代を超えて、人間の社会の中に古くから広く普遍的に存在したもののなのです。（三橋 2008, 326）

つまり、三橋は本に述べてきた日本の女装史を、世界にある「女装」文化と繋がっていると捉えているようである。また女装という現象は、独立するものではなく、普遍的であだったが西欧キリスト教の影響により徐々に失われてきたと指摘している（三橋 2008, 327）。

土着的なトランスジェンダー文化の残存が最も乏しいのはヨーロッパ世界なのです。そのことは、ヨーロッパ地域にトランスジェンダー文化が存在しなかったからではなく、その後に成立したキリスト教世界によるトランスジェンダー文化に対する抑圧がいかに苛烈だったかを物語っていると思うのです。（三橋 2008, 338）

三橋はキリスト教が持つ「男女二元論」という考え方、またそこから生じた社会的な秩序に対して、批判的である。また、米沢も各地で見られる土着的な「第三の性別」の例を挙げる。

…世界史的に見れば、中にはトランスジェンダーを「男でも女でもない」第三の性別として捉える文化も存在していた。ネイティヴアメリカンのベルダーシュはまさに「肉体性別と異なるジェンダー表現を行う者」という階層である。インドのヒジュラは、表向きはインターセクシュアルの階層（ただしカースト外の被差別階層）とされていたが、実際にはトランスジェンダーの「受け皿」として機能してきた。他にもタヒチのマフなどはこれにあたる。（米沢 2003a, 22）

米沢が指摘しているベルダーシュ⁹、ヒジュラなどが、トランスジェンダーの一つと前提され、トランスジェンダーを表現する歴史に含められ、

⁹ 「ベルダーシュ」(berdache) という用語は人類学者の Will Roscoe によって初めて使用されたが、近年では「差別用語」だと指摘されることもあり「two-spirit」の方が好ましいとされる言説もある。（<http://www.glbtc.com/social-sciences/berdache.html>、2012 年 6 月 5 日）

同時に日本と異なる社会的なジェンダー制度を示すために使用されている。田中も同じ目的で、土着的なあり方を述べる。

多くの社会では、性別に「女性」と「男性」の二つのカテゴリーしかないと考えられているが、必ずしもそうではない。インドのヒジュラや北米先住民のベルダーシュなどは、「女性」と「男性」以外の社会的性別枠組みとしてよく知られている存在である。(田中 2006, 134)

ここではジェンダー的な可能性、または多様性を示すため土着的なあり方が例として使用されているといえる。

田中、三橋と米沢は、それぞれトランスジェンダー的な存在の「自然さ」、または「普遍」を推し進めるため、各民族・文化の例を利用している。土着的なあり方が、ジェンダー的な可能性を提示するために使用されている一方で、性別二元論社会でのトランスジェンダーと呼ばれる存在を支えるためにも使われていると考えられる。ここで Carrier が指摘しているオキシデンタリズムの特徴もみられ (Carrier 1995, 6)、西洋の悪影響に対して「伝統的」、「自然」だと思われる土着なトランスジェンダーのあり方を理想化し、トランスジェンダーというあり方の正当さを主張していると指摘できる。トランスジェンダーが自然的な存在であるということを論ずることは、現代にあるトランスジェンダーへの偏見・差別と戦うためだと思われ、この戦いにおいては、敵は西洋の支配・文化的な影響であると言える。

以上の土着性の利用に関して、二つの結果を指摘できる。一つは、文化的な個性を支援することである。「ベルダーシュ」、「ヒジュラ」などの説明をする上で、多文化の多様性を明らかにすることである。文化的な個性を認めること自体は重要である一方、その個性はどう扱われるかという別の問題が共に生まれる。Califia が述べるように、ベルダーシュも 1990 年代のゲイ歴史者によって使われ、「ゲイ」として説明された (Califia 1997)。別の視点からなのだが、ここで述べた筆者は同じようにベルダーシュを「トランスジェンダー」として扱っている。しかし、「トランスジェンダー」というものは、限定的な性的パラダイムを指摘しているため、このパラダイムまたはゲイパラダイムが本当にこの土着性にふさわしいかどうかは別の問題である。

3.3. 普遍的な性同一障害・トランスジェンダー

「Gender Identity Disorder」という概念、また「transgender」の抵抗的な運動は、アメリカという文化的な背景をもとに立ち上がった。しかし一方で、トランスジェンダー・性同一性障害の概念を一般化、または普遍

化する傾向が見られ、その過程では文化的・歴史的な背景が取りこぼされていく。取りこぼされてしまうと、その結果として、トランスジェンダー・性同一性障害の概念には具体的な背景が見えない、文化的に曖昧なものとなってしまふのである。これは先に述べた土着性の個性を挙げる例と異なるが、別の側面から見ると同じ目的に向かって動いている。その目的は性同一性障害・トランスジェンダーの想像的な共有言説を作り出す、ということである。方法は逆だが、結果は同じだろう。

トランスジェンダー・性同一性障害についての書籍には、大体その本の終わりに用語解説が登場する。読者のために、性同一性障害・トランスジェンダーに関わる概念、言葉などを丁寧に分かりやすく紹介してあるが、その言葉・概念の歴史性などは述べられていない。その一つの例はまた虎井が書いた書籍にある。1996 年以前、トランスジェンダーについての日本語文献は少ないため、虎井の本はその概念に取り組む初めての「一般図書」だと言える。本の中で、トランスジェンダーに関する用語も頻繁に、かつ分かりやすく紹介してある。「TG」、「TV」、「TS」、「MTFTS」などの略語も普遍的な用語として紹介されている。その用語解説は、次のようなものである。

FTM—FEMALE TO MALE（女から男へ）。

MTF—MALE TO FEMALE（男から女へ）。

TV—TRANVESTISM・TRANSVESTITE（異性装嗜好・異性装嗜好者）

FTMTV であれば、男装をすると気が休まり、本来の自分にかえったような気がする。MTFTV には、加えて性的興奮が伴うこともある。

TG—TRANSGENDERISM・TRANSGENDER。広義には TV や TS も含むけれども、狭義には TV と TS の中間で、異性の性役割をもらいたい人。例えば FTMTG であれば、男にみられて男として扱われなくては不服であり、そのために男性ホルモンを使ったり乳房をとったりまですることもあるが、性器をいじろうとまでは思わない人がほとんど。

TS—TRANSSEXUALISM・TRANSSEXUAL（変性症〔注：性転換症〕・変性症者〔注：性転換者〕）。FTMTS であれば、どうにかしてペニスを付け、素っ裸の状態でも男としか思われたい限り気が済まない。（虎井 1996, 10-11）

注目すべき点は、このような用語解説では言葉・概念はすでに一般化され、文化的・時代的な文脈が一切ないことである。この書籍のその他の箇所においても、その言葉に関するより詳細な説明はなかった。

次に野宮による「クロスドレッサー」の説明の例を参照してみる。

クロスドレッサー

異性装をする人（異性走者）は、トランスベストタイトと呼ばれています。しかし、これは精神医学上の疾患分類であるトランスベスティズム（服装倒錯症とも訳されています）に由来する言葉であるため、最近ではこれを避けてクロスドレッサーという言葉を使う人が多くなっています。（野宮 2011, 27）

この説明では、どこの国・文化・時代を指しているか、読み取ることができない。「クロスドレッサー」は英語の言葉なので、一見イギリスやアメリカなど英語を母国語とする国々の文脈からうまれたものと思われる。しかし、Bornstein & Bergman (2010)、Nestle et al (2002) などの主にアメリカのトランスジェンダー当事者によって書かれた論文を読むと、「クロスドレッサー」という言葉は普及していても、自分自身について語るためにはあまり使われていないようである。そのため、上記の「クロスドレッサー」という説明はどこから来たか、またどうして一般的に扱われるようになったかは定かではない。

米沢泉美が編集した『トランスジェンダリズム宣言』にも用語集がある。ここで紹介された言葉は、虎井の例同様その言葉の英語版とともに説明されている。

トランスジェンダー (transgender・TG)

自分の生物学的な性別。または社会的に決められた性別およびその性別「らしい」振る舞いを求められることに対し、何らかの違和感を感じている人びと。（米沢 2003c, 265）

「性同一性障害」 (gender identity disorder・GID)

生物学的に「正常」な男／女で (intersexual ではない)、自分の人格が女／男であることと確信し、その確信が「精神障害」から来るものでも社会的な性役割からの逃避によるものでもない状態。

...

「性同一性障害」はあくまでも「正常な身体に対しての医療行為を、近代医学倫理に照らして正当なものとする」ことを目的としている医学用語であり、トランスジェンダーとは位相が異なる概念である。（米沢 2003c, 270-71）

以上の説明から、米沢による「性同一性障害」と「トランスジェンダー」の違いが見うけられる。しかし、ここで注目したいのは用語集に集められた言葉はほぼ全てが英語版と思われる言葉と一緒に紹介されている点である。例えば、「性のスペクトラム (gender spectrum)」、「性別適合手術 (sex reassignment surgery)」、「「半陰陽」・インターセクシュアル (intersex)」など。英語版がない言葉は、「ニューハーフ」、「オカマ」

と「ホルモン療法」のみだった。「ニューハーフ」は以下のように説明されている。

ニューハーフ（和製英語）

自ら「元男性だった女性」と公言し、水商売・風俗産業に従事している人。「女以上に女らしい男」というイメージが売りとなる人が多い。実際に、トランスセクシュアルもいれば、ゲイの人が「女を演じている場合」もある。ただし前者の方がかなり多い。（米沢 2003c, 266）

そして「オカマ」は以下のようなものである。

オカマ（近い意味の語として queer）

古くからある言葉。江戸時代の男娼「陰間」が変化してできたとも言われ、明治時代から戦前にかけては「男娼」とほぼ同義だった。現代の用法のニュアンスとしては、ゲイやトランスジェンダーやニューハーフをいっしょくたにして、なおかつマイナスイメージを含めた言い回しとして使われていることが多い。英語の *queer* は意味として近いが、海外のゲイたちはこの言葉を自ら敢えて戦略的に用いている。（米沢 2003c, 266）

ここで注目したいのは、各用語には英語による支えが必要であると思われる点である。米沢の用語集に限るならば、英語に基づいてカタカナ語がほぼ全てであった。そして、「オカマ」のような英語に匹敵する言葉が不足している場合は、最も意味が近いと思われる英語の言葉を通じて説明された。また、「ニューハーフ」は水商売の用語と説明され、より深い意味を否定されている。三橋は、性同一性障害という概念の登場以降、「ニューハーフ」など、水商売に関わるアイデンティティはあくまでも「職業」と分類され、トランスジェンダー・性同一性障害の当事者の中でも水商売をしている人への偏見が見られると指摘している（三橋 2008）。「ニューハーフ」より、「トランスジェンダー」という言葉が好ましいということは、ニューハーフに属している人々の存在を無化にする一方、ジェンダー的なあり方についてどう語り、どう考えるかという想像の余地を抑圧している。水商売以外の「オナベ」や「ニューハーフ」の存在は消されつつあるといえるのだろうか。

上記の引用は、Altman による「グローバル・セックス」模範の議論に関連していると思われる。セックス（性別・ジェンダー等を含む）に関するアイデンティティはグローバル化されつつ、同時に社会とともに、「普遍化」されている（Altman 2001）。しかし、Altman の議論によるとこの普遍化されたアイデンティティは、現在のままだと必然的にアメリカのモデルに集約されていく。Altman の議論は学問的に有力であった一

方、特にアジア研究を専門とする学者から批判をうけた。**Wilson** は特にアメリカの影響力を認めながらも、アジアにおけるクィア・ポリティックスは、単にアメリカからの輸入ではなく、「ハイブリッド」でディアスポリック的なものであり、戦略的な行動と説明している (**Wilson** 2008)。上記の引用をみると、言葉自体は英語からの翻訳であっても、その説明は英語を第一言語とする文化背景（例えばアメリカやイギリス）に必ずしも合致するとはいえないだろう。そのため、**Wilson** が指摘する「ハイブリッド」や「ディアスポリック的」な用語になっていると言える。しかし、ここで引用したような用語解説は分かりやすい一方で、単純すぎもする。必ずしも明確に存在している現象を指摘しているわけでもなく、その使用が普遍的であり、また想像的な基準を作り出しているといえる。

しかしながら米沢と虎井の場合、用語の定義は運動的な戦略だともいえるのではないか。1990年代、ゲイ・レズビアン の団体OCCURは同性愛をめぐるアメリカの用語や理解を戦略的に広めようとし、「オカマ」など当時使用されていた言葉の適切性を批判した (**Suganuma** 2007, 494)。**Suganuma**によると、この戦略は1990年代の変化しつつあったゲイ・アイデンティティに大きく寄与した (**Suganuma** 2007, 495)。「オカマ」はゲイが使うべき言葉ではない、またゲイ・トランスジェンダーに対して差別語であると指摘され、このことからゲイ運動そして次にトランスジェンダー運動から外されてきた存在である。「オカマ」は歴史を持った言葉で、新しいアイデンティティを作り出す際に必ず問題となる用語である。クィアな存在に社会的な承認を得るための戦略だと言えるが、ここでアメリカのクィア運動と戦略が違う点も見られる。アメリカの場合、活動家が元々蔑称であった「**queer**」や「**gay**」という用語を再定義し、誇りをもって「私はクィア」と唱えるようになった。しかし、日本の場合はそのような戦略でなく、アイデンティティの移行を目的に掲げ、「私はオカマ」¹⁰より「私はゲイ」と言うようになった。この用語の移行という戦略は、使用者に多大な影響を与えたと思われ、どの言葉がより「正当」か、という議論まで導いたのである。

4. むすび

本論文は日本語で執筆された日本のトランスジェンダー・性同一性障害についての書籍による「外国」・「異文化」の使用および役割を考察した。

¹⁰ そういったケースもあるが、必ずしも主流派ではない。[松沢呉一](#)、[伏見憲明](#)、[及川健二](#)他、2002.『「オカマ」は差別か『週刊金曜日』の差別表現事件』ポット出版を参照。

考察においては、「良い」または「悪い」という価値観的な判断をするつもりはなく、いかにして、またはいかなる目的のために「外国」・「異文化」が使われるのかに焦点を置いた。用語の使用目的は政治的なものもあれば、個人的なものもあり、さまざまな文脈や目的で利用されていたといえるだろう。

オキシデンタリズムまたはオリエンタリズムは、自文化の外に存在しているものを提示し、それに対して内側から欲望が生じることを明らかにする (Lindstrom 1995 ; Spencer 1995)。本研究の結果、ここまで取り上げてきた各書籍の中で、トランスジェンダーをことができる。「性同一性障害」という国際的な機関で認めている診断カテゴリーが成立したため、その診断に関して他国の状況と比べることは当たり前だと考えられる。しかし、性同一性障害だけではなく、結婚、私生活、差別、健康など人間をめぐる様々な制度の問題も、国際的な基準がつくられ、国の問題に限らず「世界」の問題になりつつある一方、そうしてできた国際的な基準・法律に従い、世界中の人々の動機・生き方・存在も影響される。また、「国際的」な基準・法律といっても、どの国がそのモデルだと言えるか、またはモデルがあるかどうか、などの諸問題も考慮すべきである。

Valentine (2007) は、ニューヨークにあるトランスジェンダーコミュニティを調査し、そのコミュニティの中にある「トランスジェンダー」の異なる意味や葛藤を指摘した。しかし、葛藤や意見の相違があっても、「トランスジェンダー」という想像的なカテゴリーに属し、または含められ、そして創造的なカテゴリーであるからこそ友情や共感がうまれ、国内にとどまらない国際的な政治運動ができることを指摘している。例えば、虎井の国際的な FTM ネットワークや論文に登場してくる欧米との関係性に対して彼は、「別の国にいる、我々（または彼女等・彼等）と同じような人がいる」という表現を用いており、彼が絆を作る動機になっていると言える。「トランスジェンダー」「性同一性障害」という概念は、外国・異文化の例を利用しながら様々な目的を果たせるが、同時に概念の一般化を図ることは各地域・民族の文化的な個性を無視し、それぞれの持つ背景や文脈を取りこぼしていくことに繋がることは今後も危惧される。

参考文献

- 石田仁. 2008. 「創られる「争点」、消される〈争点〉—ブルーボーイ裁判の内側における法の概則」 石田仁（編）2008. 『性同一性障害：ジェンダー・医療・特例法』 御茶の水書房: 215-48.

- 石原明・大島俊之（編）. 2001. 『性同一性障害と法律：論説・資料・Q&A』 晃洋書房
- 大島俊之. 2002. 『性同一性障害と法』 日本評論社
- 筒井真樹. 2003a. 「ヴァージニア・プリンスとトランスジェンダー」 『トランスジェンダリズム宣言：性別の自己決定権と多様な性の肯定』 130-39.
- . 2003b. 「アメリカのトランスジェンダー・アイデンティティ」 『トランスジェンダリズム宣言：性別の自己決定権と多様な性の肯定』 140-55.
- 虎井まさ衛. 1996. 『女から男になったワタシ』 青弓社
- . 2000. 『ある性転換者の幸福論』 十月舎
- . 2001. 『トランスジェンダーの仲間たち』 青弓社
- . 2003a. 『トランスジェンダーの時代：性同一性障害の現在（いま）』 星雲社（発売）
- . 2003b. 『男の戸籍をください』 毎日新聞社
- 南野知恵子（監修）. 2004. 『「解説」性同一性障害者性別取扱特例法』 日本加除出版
- 中村美亜. 2005. 『心には性別はあるのか?：性同一性障害（ジェンダー・アイデンティティ・ディスオーダー）のよりよい理解とケアのために』 医療文化社
- 野宮亜紀[ほか]. 2011. 『性同一性障害って何?：一人一人の性のありようを大切にするために』 緑風出版
- 松尾寿子. 1997. 『トランスジェンダリズムー性別の彼岸』 世織書房
- 三橋順子. 1997. 「トランスジェンダー論ー文化人類学の視点から」 クィア・スタディーズ編集委員会（編）『クィア・スタディーズ '97』 七つ森書館：120-40.
- . 2006a. 「性転換」の社会史（一）ー日本における「性転換」概念と形成とその実態、一九五〇～六〇年代を中心にー」『戦後日本女装・同性愛研究』
- . 2006b. 「性転換」の社会史（二）ー「性転換」のアンダーグラウンド化と報道、1970-90年代前半を中心にー」『戦後日本女装・同性愛研究』
- . 2008. 『女装と日本人』 講談社
- 稜平. 2009 『女から男になりました。～性同一性障害と闘った24年間～』 文芸社
- 竹内佐千子. 2008. 『男になりタイ！ー私の彼氏は元オンナ』 メディアファクトリー
- 矢島正見（編）. 2006. 『戦後日本女装・同性愛研究』 中央大学出版部
- キース・ビンセント、風間孝、河口和也. 1997. 『ゲイ・スタディーズ』 青土社

- 山内俊雄. 1999. 『性転換手術は許されるのか：性同一性障害と性のあり方』 明石書店
- . 2000. 『性の境界：からだの性とこころの性』 岩波書店
- (編). 2004. 『性同一性障害の基礎と臨床』 東京：新興医学出版社
- 米沢泉美 (編). 2003a. 『トランスジェンダリズム宣言：性別の自己決定権と多様な性の肯定』 社会批評社
- . 2003b. 「まえがき」 『トランスジェンダリズム宣言：性別の自己決定権と多様な性の肯定』 10-13.
- . 2003c. 「トランスジェンダー用語集」 『トランスジェンダリズム宣言：性別の自己決定権と多様な性の肯定』 265-71.
- Altman, Dennis. 2001. *Global sex*. Chicago: University of Chicago Press.
- American Psychiatric Association. 2004. *Diagnostic and statistical manual of mental disorders: DSM-IV-TR*. 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸(訳) 医学書院
- Bornstein, Kate, and S. Bear Bergman, eds. 2010. *Gender outlaws: The next generation*. Berkeley, CA: Seal.
- Califa, Patrick. 1997. *Sex changes: The politics of transgenderism*. Berkeley, CA: Cleis Press.
- Carrier, James G., ed. 1995a. *Occidentalism: Images of the West*. New York: Oxford University Press.
- . 1995b. Introduction to *Occidentalism: Images of the West*, 1-32. New York: Oxford University Press.
- Creighton, Mille R. 1995. Imaging the other in Japanese advertising campaigns. In *Occidentalism: Images of the West*, ed. James G. Carrier, 135-60. New York: Oxford University Press.
- Frühstück, Sabine. 2003. *Colonizing sex: Sexology and social control in modern Japan*. Berkeley, CA: University of California Press.
- Lindstrom, Lamont. 1995. Cargoism and occidentalism. In *Occidentalism: Images of the West*, ed. James G. Carrier, 33-60. New York: Oxford University Press.
- McLelland, Mark. 2005. *Queer Japan from the Pacific War to the Internet age*. Lanham, Md.: Rowman & Littlefield.
- Nestle, Joan, Clare Howell, and Riki Anne Wilchins, eds. 2002. *GenderQueer: Voices from beyond the sexual binary*. Los Angeles: Alyson.
- Reichert, Jim. 2006. *In the company of men: Representations of male-male sexuality in Meiji literature*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Spencer, Jonathan. 1995. Occidentalism in the East: The uses of the West in the politics and anthropology of South Asia. In *Occidentalism: Images of the West*, ed. James G. Carrier, 234-57. New York: Oxford University Press.

- Stryker, Susan. 2008. *Transgender history*. Berkeley, CA: Seal.
- . 2006. (De)Subjugated knowledges: An introduction to transgender studies. In *The transgender studies reader*, ed. Susan Stryker and Stephen Whittle, 1-17. New York: Routledge.
- Suganuma, Katsuhiko. 2007. Associative identity politics: Unmasking the multi-layered formation of queer male selves in 1990s Japan. *Inter-Asia Cultural Studies* 8:4 (2007): 485-502.
- Towle, Evan B., and Lynn M. Morgan. 2006. Romancing the transgender native. In *The transgender studies reader*, ed. Susan Stryker and Stephen Whittle, 666-84. New York: Routledge.
- Valentine, David. 2007. *Imagining transgender: An ethnography of a category*. Durham: Duke UP.
- Wilson, Ara. 2006. Queering Asia. *Intersections: Gender, History and Culture in the Asian Context* 14, November (2006): <http://intersections.anu.edu.au/issue14/wilson.html> (accessed September 1, 2012).
-

S.P.F. Dale is a PhD candidate in Global Studies at Sophia University and a Research Assistant at the Institute of Comparative Culture, Sophia University, whose dissertation focuses on *x-jendā* as identity/performance as well as the social politics surrounding the term. Current research interests include the construction/deconstruction of gender/sexual identities, the search for alternative frameworks in the study of gender and sexuality as well as the study and theoretical inclusion of various individuals in society. Upcoming publications include "An Introduction to *x-jendā*: Examining a new gender identity in Japan" (2012) in the online journal *Intersections*.